

А. Н. ТОЛСТОЙ



ХОЖДЕНИЕ ПО МУКАМ

開かれた處女地

ショールホフ
原 卓 也 譯

新 版 世 界 文 學 全 集

24

新 潮 社 版

新版世界文学全集 24

開かれた処女地

昭和三十三年九月二十六日 印刷
昭和三十三年九月三十日 発行

定価 参百五拾円

地方
売価 参百六拾円

訳者 原 卓 也

発行者 佐藤 義 夫
東京都新宿区矢来町七一

発行所 株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一

電話東京 〇四七一〜九番
振替東京 八〇八番

乱丁・落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

印刷 東光印刷株式会社
製本 共同製本所

© Printed in Japan

解 説

「開かれた処女地」の第一部は、一九三〇年、シヨロホフが二十五歳の時から書き始め、一九三二年一月から九月まで、雑誌「新世界」の紙上に発表された。「静かなドン」で、戦争と革命・国内戦におけるコサックの姿をたくみに描きだした彼は、「開かれた処女地」の中で、ソヴェートの第二の国内戦ともいへば、農村集団化運動のはげしい様相をあますところなく捉え、これを芸術的に再現してみせた。この小説を書くために、彼は既に第二部まで発表していた「静かなドン」の執筆を一時中止したほどである。このことは、彼が「静かなドン」の創作に行きづまったことを意味するものではなく、「開かれた処女地」のテーマがどれほど切実なものであったかを示すものにはかならない。一九三〇年一月五日のソ同盟共産党中央委員会の決定によって、最も重要な穀物地方と指定されたドン河沿岸における農村集団化の運動や、それにともなう富農たちとの闘争などを目のあたりに見たシヨロホフは、どうしてもこれを記録にとどめておかなければならないと考えたのであった。作家が自己の文学を通じて政治に関与するというのは、おそらくこういうケースを指すのであろう。

ところで、この作品を十分に理解するためには、作品の背景となっている当時の歴史を知っておく必要があると思う。

周知のように、ソヴェートは革命後きわめて短時日のうちに社会主義体制を確立し、特に工業面での成功はめざましいものがあつた。一九二七年には、すでに社会主義的工業化政策の成功は確定し、大規模の社会主義的産業は急速度で発展した。

しかし、農業、それも特に穀物農業の分野では、事態は太分異なり、穀物産出高のうち都市へ供給される量は、戦前の三分の一強に過ぎなかった。この原因としては、一九一八年以来の、農業経営の細分化が依然として存続していること、またそれらの細分化された農場が市場へ最少限度しか穀物を供給できなくなったこと、などが考えられた。この状態から脱するためには、農民の個人経営を大規模の社会主義的経営、つまりコルホーズに切り

かえ、集団的耕作の基礎の上に農業機械とトラクタを適用することが必要であった。これをしない限り、都市や軍隊が常に食糧の欠乏にあえがねばならぬことは、明らかな事実だった。だから、一九二七年十二月二日に開かれた第十五回党大会で、農村集団化の方針が決定されたのは、いわば最後の措置とも言うべきものだったのである。しかし、「開かれた処女地」を読んでも判る通り、農村集団化の運動は、全農民がすらすらとホルホーズに加入するという形をとらずに、富農に対する闘争という過程をへて行われた。この富農抑制政策は一九二九年までつづけられたが、一九二九年末、ソヴェート政府は、階級としての富農絶滅政策に転じた。すなわち、土地貸借や雇傭労働に関する法律を廃止し、富農から土地や小作人を奪い、ホルホーズのために富農の家畜、農耕機械、その他の財産を没収することを農民に許可したのである。もちろん富農たちもこれに反抗し、白軍の殘党と手を結んでひそかに反乱のチャンスをうかがった。しかし、富農たちはつぎつぎに財産を没収され、追放されて、その財産はホルホーズの手に移って行った。この点が、農村集団化をさして《新しい革命》とよぶ理由である。ところが、集団化の成功とともに、実務にたずさわる黨員たちの実践上の誤ちや、行き過ぎが目立つようになってきた。そここの地で、ホルホーズ加入の際の自由意志ということがなおざりにされ、成績を上げるためには半ば強制的に農民をホルホーズに加入させるといった現象が見られるようになったのだ。もともと、ホルホーズの基本線はアルテリ（農業組合）であり、そこでは基本的生産手段だけが共有されるべきであるのに、地方によっては、アルテリを素通りして一気にコムミュン（共產農場）にまで持って行こうと試み、そのために、搾乳用の家畜や、家禽、小家畜などまで共有化を行うようになった。このような行き過ぎは、当然の結果として、ホルホーズに対する農民の信頼を低め、反ソヴェート分子の絶好の攻撃目標となった。そこで、せっかく軌道に乗りにかけた集団化運動を失敗に終らせぬために発表されたのが、一九三〇年三月二日、中央委員会の決定によるスターリンの論文「成功の眩惑」であり、三月十五日の中央委員会の決定「ホルホーズ運動における党方針の歪曲との闘争について」であった。これらの論文とそれともなう政策の結果、いったんは失敗しかけた集団化運動もまた着実にその成果をあらわしはじめ、農民はホルホーズに全村、全部落をあげて加入するようになったのである。ここまでには到る道は決して容易ではなかった。

シヨロホフは、このような農村集団化運動の過程や、それにとまなう農民たちの悩みや、喜びを、芸術味豊かに描きだしてみせたのである。

コルホーズ運動をテーマとした小説は、「開かれた処女地」のほかにもたくさんある。パンフョーロフのぼう大な長篇「ブルースキ」もそうだし、そのほかにも、たとえば、カラワーエワの「製材工場」、ゴルブーノフの「碎氷期」、ザモイスキイの「わらじ」、スターフスキイの「潰走」、ペルミチンの「爪」、「畏」などは、いずれも農村集団化や、富農たちとのはげしい闘争を扱った作品だ。しかし、「開かれた処女地」以前に発表されたそれらの作品の多くは、農村におけるこの革命の変革の、それぞれ深いところで緊密に結びついている、さまざまな特殊性を、一面的にしか描きださなかった。ある作品では、運動を指導するコムニストが、農民たちから全く隔絶され、浮き上ったものとして描かれていたり、別の作品では歴史的事件の推移がごく皮相に捉えられていたりした。その意味で「開かれた処女地」は、この運動の直面したさまざまな困難や、決断にまよう中農たちの姿や、運動に共鳴して積極的に党に協力する農民たちの姿を、包括的に、しかも芸術的に描いた、ソヴェート文学最初の作品と言ってよいのである。あるいは、《農村における新しい革命》時代のモニュメントと言ってもよいだろう。

ドン河沿岸地方で集団化運動が行われていた頃、シヨロホフはニージネ・ヤブロフスキイ部落で、一人の中農コサックと会った。そのコサックは自ら進んでコルホーズに加入し、馬や牛を共同牧舎に納めたほどの意識の高い農民だったが、それでも、コルホーズに納めた自分の財産に対する未練が、時折りはげしく心の中に燃え上ることをシヨロホフに告白した。新しい世界への希望に燃えながら、なお旧世界への未練をたちきれぬこの真面目なコサックの気持は、コサックの生活を十分知っているシヨロホフにとって、判りすぎるほどよく判ったし、ある意味では共感すらおぼえたようだ。このコサックが「開かれた処女地」の中に、コンドラート・マイダンニコフとして描かれていることは容易に推測がつくし、またシヨロホフの直接の創作動機になったと断じても、さほど誤りではないだろう。言いかえれば、シヨロホフは、コンドラート・マイダンニコフを描くために、この小説を書いたのだと考えてもよいのである。

と言ったところで、コンドラート・マイダンニコフがこの小説の主人公だという意味ではない。「静かなドン」

でシヨロホフが、主人公たちの個人的な運命を追求することによって革命の姿を描こうとしていたとするならば、この作品では、あくまでもコサック階級の生活を作るの中心におき、その推移を描くことにおいて、農村集団化の過程や意義を示そうとしているのだ。厳密に言えば、この小説には中心人物はあつても、主人公はいないのである。ダヴィドフも、ナグリノフも、ラズミョートノフも、ルーシカも、それぞれ中心人物にはちがいないが、決して主人公ではない。ここにこの小説の特殊性とすぐれた点が存在している。今から数年前、戦後の荒廃した農村におけるコミニストの活動を描いたいくつかの作品が、いずれも芸術的に質が低く、のちに無葛藤理論の弊害を受けたものとして批判されなければならなかった一つの理由は、それらの作者が、集団を作品の中心におかずに、個人の主人公を作りだしたためではなかったろうか。農村における立ち遅れや保守性などの障害は、決して一個人の力によって克服し得る筈のものではないのだ。たとえば、ババエフスキの「金星勲章の騎士」のように、復讐して故郷の農村に帰った主人公が、さまざまな困難にぶつかりながら、少しもひるまずにそれを克服して行き、ついにコルホーズを立派なものにするというような小説は、現実をことさら粉飾したものと見られてもやむを得ないだろう。その点「開かれた処女地」は、党と農民たちが全く一つに結びついて、かく乱を狙う富農や反ソ分子たちとたたかって行く姿を、現実には密著した姿勢で捉えているのである。小説の中に、富農におどらされた農民たちが、種子麦をおさめた共同穀倉の鍵を奪おうとして、コルホーズ議長ダヴィドフを襲う場面があるが、あの場面などは、農村における革命のなまなましい様相を、芸術的に描破した個所といってよく、この小説におそろしいほどの迫力と緊迫感を与えている。

ところで「開かれた処女地」の第一部が書かれたあと、久しい間第二部が発表されなかったで、この小説は遂に未完のまま終るのかと思われていたものだ。当時シヨロホフが「開かれた処女地」を完結しなかった事情を推測するにあたっては、次のような彼自身の言葉も参考になるであろう。「私は『開かれた処女地』を、さまざまな事件の記憶がまだなまなましかった一九三〇年に、そのなまなましい跡をたどって書いたのだった。そして、そのなまなましい印象の下に『開かれた処女地』を書き始めて、第一部の終りまで書き上げた時、私は、現在ではもはや大切なのはこのことではない、読者に感動を与えるのはこのことではないのだ、というジレンマに行き

當つたのである。お前は、いかにしてコルホーズが建設されたかを書いているが、現在では、労働日の問題が持ち上つてゐるのだぞ、というジレンマ……事件は人々を追ひこし、乗りこえて行く、ここに課題の難しさがあるのだ……」たしかに、政治的なテーマで小説を書く場合、もつとも難しいのはこの点である。逆説的に言えば、「開かれた処女地」の場合、テーマがあまりにも当面の、切実なものであつただけに、かえつて小説の第二部が必要でなかつたのかも知れない。ところが、第一部の発表から二十三年たった一九五五年、第二部の最初の数章が「アガニョーク」誌に連載され、更にその後の数章が「オクチャープリ」誌に発表された。しかしそれから更に三年の月日が流れたが、いまだに「開かれた処女地」の第二部は完結されずにいる。このようなことは、世界文学の歴史をひもといても、あまり見当らぬ現象と言えよう。第一部発表後これほど長い年月をへて第二部を書き始めた理由ははっきり判らないが、私の推測では、次のような国内事情も大いにシヨロホフの創作意欲を刺激したものだと思われる。つまり、一九五六年二月の第二十回党大会におけるフルシチョフの報告演説でも明らかなように、当時、カザフスタン、シベリヤその他の地方の未耕地や長期休閑地の開拓ということが、新しい政治問題として農業政策の前面に打ちだされてきたのである。それらの広大な土地を開発し、そこに巨大なコルホーズ、ソフホーズを建設するということが、ソヴェート政府の短時日に行うべき課題であつた。このような時に、既にコルホーズ問題を手がけていた作家シヨロホフが、時代の要求にこたえて第二部を書く氣になつたとしても、いささかの不思議もない筈である。だが、現在まで完結しないところから考えると、この小説は結局未完のままになるかも知れない。しかし、かりに小説として完結しなくとも、「開かれた処女地」が、あの苦しかった建設期の輝かしいモニメントであることに変わりはない。前にも言った通り、この小説では集団が主人公であるが、そのためと、更にはこの小説が未完であるために、各人物が十分描きつくされていないうらみはあるにせよ、「開かれた処女地」の持つ意義は高く評価されなければならない。「静かなドン」といい、この小説といい、最も難しい大きなテーマに全身でとりくんで、最後まで食いさがるシヨロホフの態度は、芸術家としてきわめて立派なものと言えるだろう。

シヨロホフの伝記については、私自身「静かなドン」の解説やその他で書いてきたし、そのほかにも既にいくつか書かれているので、ここでは詳しく触れないことにするが、これまでシヨロホフの幼年・少年時代については、あまり明らかにされていなかったようだ。ところが、一九五五年に発行されたB・グーラの「シヨロホフの生活と作品」の中に、これらの、今まで判らなかった部分について、かなり詳しい記述があるので、それを紹介する。

シヨロホフは一九〇五年五月二十四日、ドネツ管区(旧ドン軍管区、現在はカーメンスク州)の、ヴォーシンスカヤ村クルジーン部落に生れた。初期の短篇集「るり色の曠野」に寄せた自叙伝の中で、彼は自分の母を「半コサック、半農婦」と書いているが、グーラによると、シヨロホフの母は農奴の娘だったということだ。彼女の父、つまりシヨロホフの祖父は一八六一年の農奴解放後も、地主のために働き、一生困窮のうちに過ごしたという。シヨロホフの母アナスタシー・ダニロヴナ・チエルニコワは、両親を早く失い、奉公に出されて、結婚するまで地主の家の小間使いをしていた。

シヨロホフの父アレクサンドル・ミハイロウィッチは、リャザン県の出身だったので、ドンに住みついてからというもの、「静かなドン」の中でしばしば取り上げられている『よその』の苦しみを始終味わわねばならなかった。コサックの掟に従って彼は自分の土地というものを持てず、賃借りした土地を耕して細々と生計を立てざるを得なかった。そのために、彼は何度も職業をかえ、家族をつれてドン河沿岸の部落や村を転々と移り歩いた。最低の教育しか受けなかった彼は、せめて自分の息子にだけは十分勉強させたいと思い、息子の勉学のためにならあらゆるものを犠牲にするほどの熱の入れ方だった。彼は金をためては本を買い集めた。それらの本のうちでは、ゴーゴリやレフ・トルストイなどロシア古典作家の作品が圧倒的に多かったという。シヨロホフは小学校へ上る前からそれらの本に親しみ始め、やはり就学前に家庭教師について勉強を始めた。

彼が正式に学校で学んだのは一九一四年から一八年までであるが、この間に彼はロシア古典作家の作品を貪るように読みあさり、自分でもゴーゴリの小説を脚色して遊び友達を集めて上演したり、気の利いたエピソードを作ったりした。だが、一九一八年ドイツ軍が、彼の学校のある町ボグチャルに迫ってきたため、やむなく勉学を

中止して、家に帰った。やがて革命が起り、国内戦が始まった。当時十五歳の少年だったシヨロホフは、生れたばかりのソヴェート政権を守るために、銃を手にして戦った。彼は食糧徴発隊に義勇兵として参加し、食糧を隠匿する富農たちと戦ったのである。また、そのかたわら、地区の文化運動にも積極的に協力し、文盲清算に一役買う一方、カルギンスカヤ村の演劇サークルの最も熱心なメンバーでもあった。当時、青年たちが『新世界』^{ノヴィー・ミール}という表題の、ガリ版刷り日刊紙を刊行し、毎晩村の集會場で演劇の集いをもよおしていた。シヨロホフはここでもなかなかの名優だったらしく、芝居に彼が出演する日は集會場に入りきれぬほどたくさん見物が押ししかけ、彼を何度も何度も舞台に呼び戻して、拍手の嵐が鳴りやまなかったそうである。

一九二一年になると、フォミン、メリホフ、マステラーコフなど、白軍の匪党がドン地方に出没し始めるようになり、シヨロホフはふたたび武器をとって、赤軍兵とともに戦いに赴いた。一度なぞは、南ロシア全土に勇名をとどろかせていたアナキスト、マフノの軍隊に捕虜になったこともある。これらの貴重な経験は、のちにみな、「ドン物語」や、「るり色の曠野」や、「静かなドン」などの作品の中に立派に実を結んでいるのだ。ところで、「静かなドン」の主人公グリゴリー・メレホフが、革命にしばしば懷疑をおぼえ、動揺を経験しているところから推して、シヨロホフ自身も若い頃は同じような疑惑を味わったのだろうと考えている人も多いようであるが、それは誤りである。シヨロホフは、文字通り、革命の嵐の中から生れてた、きつすいのソヴェート作家なのである。彼より前の世代の作家の作品にくらべると、彼の作品に逞しい生命力と力強い自信が常感じられるのは、そのためにほかならない。

それはともかく、少年時代の彼は、今言ったような波風多い苦しい環境の中で、いつも前を見つめたまま育ってきた。国内戦が終って、モスクワに出たあと、やがて「ドン物語」によって作家の道を踏み出すのだが、それ以後のことはわれわれの知っている通りである。現在まだ五十三歳であるが、今やソヴェート文壇の最高の地位を占め、作家大会や党大会における発言を見ても、きわめて影響力の大きい作家であることが判る。今後も大きな期待をかけてよい作家である。

この小説は「静かなドン」と同じようにドン地方の方言をふんだんに使い、実に特徴のある美しい文章と会話

で書かれている。しかし、日本語の方言は活字にした場合あまり美しい感じを与えないし、特に私のように、東京生れで東京育ちの人間が、生半可な知識で使用すると、まるで落語に出てくるような、類型的なものとなり、ひどく読みづらいものになるおそれがあるので、この訳文ではなるべく方言の使用をさけることにした。

なお、本書を訳す上で、ブブノワ、ワリコフ両先生にいろいろ御教示を頂いた。心からお礼の言葉を述べさせて頂きたいと思う。

一九五八年八月

原 卓 也

目次

第一篇.....一三

第二篇.....三五

開
か
れ
た
処
女
地

第一篇

第一章

一月の末ともなると、はじめて訪れた雪どけ日和の風に
乗って、桜の園がこころよい香りを漂わせる。太陽が暖か
い光を送ってくれさえすれば、真昼時、どこか風の吹きつ
けぬ場所では、かすかに感じとれるうら淋しい桜の樹皮の
匂いが、融けた雪の淡い湿気と入りまじり、雪の下や、朽
葉のかげから顔をのぞかせた大地の、昔ながらの力強い匂
いと入りまじって漂う。

色とりどりともいふべき、さまざまの匂いを秘めたほの
かな香りは、青い宵闇の降りるまで、去りもやらず、園の
上に立ちこめている。やがて、葉の一枚もない枝々の向う
に、うす緑の衣裳をまとった月の鎌がさしのぞき、餌をあ
さる兎が雪の上に点々と足跡を印してゆく……

と、そのうちに、風が曠野の丘の頂きから、霜にやかれ
たよもぎの、かすかなかすかな匂いを園に持ち運び、日中
の香りや物音は消え去って行く。そして、よもぎや、ブリ
ヤン草や、刈入後の畑に色あせ萎れている雑草や、うねう

ねと丘のように起伏する耕畦などの上を通って、夜が、灰
色狼のごとくしのびやかに、東からやって来る——背後の
曠野に、たそがれのかげを足跡のように残しながら。

一九三〇年一月のある晩、曠野に近い部落端れの小路を
通って、一人の騎馬の男が、グレミチャーチイ・ローク部落
にやって来た。小川のほとりで、男は、足の付根に汗が縋
毛よろしく真白に凍りついている、疲れきった馬をとめる
と、鞍を下りた。狭い小路の両側に打ちつく桜の園の闇
の上や、鳥のように点在する白楊の林の上に、細い月が高く
かかっていた。小道は暗く、静かだった。川向うのどこか
で、犬が騒がしく吠え、灯りがポツンとただ一つ、黄色い
光を投げていた。男は、ひんやりとする空気を貪るように
鼻から吸いこむと、ゆっくり手袋をぬいで、煙草に火をつ
けた。やがて馬の肚帯を締め直し、鞍褥の下に指をさし入
れて、じつとりと汗ばんだ馬の背の、熱っぽい濡れた肌を
感ずると、また自分の大きな身体を軽々と鞍に乗せ、冬に
も凍ることのない浅い小川を渡り始めた。馬は、川底に敷
きつめている小石にうつろな蹄鉄の音を響かせて進み、歩
きながら水を飲もうと首を伸ばしかけたが、乗り手にせき
立てられ、脾腹を震わせて、なだらかな対岸の斜面に駆け
上った。

櫓の滑り木の軋みと人声とを聞きつけて、男はまた馬を
とめた。馬は物音のする方へ用心深げに耳をそばだて、首

をめぐらした。銀の鞅むちがいと、銀を張ったコサック鞍の高い鞍杵くらとが、月の光を浴びて、小路の暗闇に思いがけなくきらりと白い光を放った。男は手綱を鞍杵に投げかけると、それまで肩にかけていたラクダの防寒頭巾をそそくさとかぶって、すっぱり顔をくるみ、大股のトロットで走り出した。荷籠かごのわきを駆け抜けると、前のように並み足で馬を進めたが、頭巾はとらなかつた。

もう部落に入ってから、通りすがりの女にたずねた。

「ねえ、ちょっと、おかみさん、ヤコフ・オストローヴフはどこに住んでるね？」

「ヤコフ・ルーキッチのことかね？」

「うん、それだ」

「だったら、あのポプラの向うがそうですよ、瓦屋根のが見えるでしょ？」

「ああ分った。どうも」

だだっ広い瓦屋根の百姓家のそばで馬を下りると、男は木戸から馬を引き入れ、鞭の柄でそっと窓を叩いて、呼んだ。

「今晚は！ ヤコフ・ルーキッチ、ちょっと顔を貸してくれよ」

上衣を羽織っただけの姿で、帽子もかぶらずに主人が表階段の上へ出て来た。彼は客の姿に目をこらしながら、階段を下りて来た。

「誰だね、今時分？」半白の口髭に微笑を浮かべながら、彼はたずねた。

「判らんかね、ルーキッチ？ 泊めてもらうよ。それから、馬を暖かいところへ入れてやりたいんだが、どこだい？」

「いやさ、同志タウリシチ、さっぱり見当がつきませんぜ。あんた、地区執行委員会の方と違いますか？ でなきや、農業部の

人じゃねえかな？ はてな、何か憶えがあるぞ……あんたの声を、どこかで聞いたことがあるように思うんだが……」

客はきれいに剃刀を当てた口許を微笑に皺めながら、防寒頭巾を左右に開いた。

「まさかポロフツエフを忘れたわけじゃあるまい？」

と、ヤコフ・ルーキッチは不意に怯えきつてあたりをうかがい、顔色をなくして囁いた。

「ああ、大尉殿でしたか！……どこから、また？……大尉殿！……馬の世話は、今すぐしますから……既へ入れますよ……全く何年ぶりですか……」

「おい、おい、もうちょっと静かに頼むぜ！ほんとに暫くだったな……お前、馬衣を持ってるか？ それから、この家には、よその者は誰もいないだろうな？」

客は手綱を主人に渡した。馬は、見ず知らずの人の手の動きに物倦げに従い、頸を伸ばして高々と頭をもたげ、後足を大儀そうにひきずりながら、厩に向った。そして木張りの床を蹄でコツコツと叩き、ほかの馬の住んでいた匂い